㉘ 張天成――張世賢。明代。著書に『図註八十一難経』。
㉙ 虞天民――虞摶。『医学正伝』『方脈発蒙』などがある。
㉚ 丁履中――丁錦。清乾隆年間。『古本難経闡注』を著す。
㉛ 黄坤載――黄元御。清代。『難経懸解』など著書多し。
㉜ 呉　澄――元代の儒者。
㉝ 呉保神――現南京中医学院教授。著書に『傷寒百家注』『金匱五十家注』などがある。

第一章　脈学

第一難

◎寸口の脈と、経脈の営衛の度数について論ずる。

【原文】

一難曰、十二経皆有動脈、独取寸口、以決五蔵六府死生吉凶之法、何謂也。

然。寸口者、脈之大会、手太陰之脈動也。人一呼脈行三寸、一吸脈行三寸、呼吸定息、脈行六寸。人一日一夜、凡一万三千五百息、脈行五十度、周於身。漏水下百刻、栄衛行陽二十五度、行陰亦二十五度、為一周也、故五十度復会於手太陰。寸口者、五蔵六府之所終始、故法取於寸口也。

【書き下し】

一難に曰く、十二経①にみな動脈②あり、ひとり寸口③にのみ取りて、以って五蔵六府の死生吉凶の法④を

決す、とは何の謂ぞや。

然り⑤。寸口は、脈の大会⑥、手の太陰の脈動⑦なり。人⑧一呼にして脈の行ること三寸、一吸にして脈の行ること三寸、呼吸定息⑨にして、脈の行ること六寸なり。人は一日一夜に、およそ一万三千五百息し、脈の行ること五十度⑩、身を周る⑪。漏水の下ること百刻⑫にして、栄衛の陽⑬を行ること二十五度、陰を行ることもまた二十五度⑭を、一周⑮となすなり、故に五十度にして復た手の太陰に会す。寸口は、五蔵六府の終始するところ、故に法を寸口に取るなり。

【語釈】

① 十二経――手足の三陰三陽の経脈は合計で十二、これを「十二経」と略称する。

② 動脈――経脈の搏動が手で感受されるところは、すべて「動脈」という。

③ 寸口――切脈部位の名称、手掌後部の手関節のところ。ここでいう「寸口」とは寸関尺の三部を指す。

④ 法――診察方法。

⑤ 然り――滑伯仁は、「然りとは、答える言葉である」という。

⑥ 大会――集合する、会うという意味。

⑦ 脈動――『脈経』では「動脈」とする。

⑧ 人――ここでは健康な人をいう。

⑨ 定息――一呼一吸を「一息」とし、一息が終わったときを「定息」と称している。

⑩ 度――ここでは「周回数」と解釈する。

⑪ 周る――すなわち「まわる」こと。

⑫ 漏水の下ること百刻――古代の計時方法。銅壺に水を入れ、水の滴りをはかる目盛（これが刻である）によって時間計算をしたので、「漏水」という。銅壺には目盛が一百刻しるされていて一昼夜を計った。ゆえに（一昼夜を）「百刻」という。

⑬ 栄衛――「栄」は「営」とも通じる。「営衛」とも書く。

⑭ 栄衛の陽を行ること二十五度、陰を行ることもまた二十五度――「栄衛」は水穀が化した精気をいう。「陽」は日中を指し、「陰」は夜間を指す。「二十五度」は、営衛が日中と夜間に循行する周回数をいう。

⑮ 一周――営衛が一昼夜に五十回循環するのを「一周」と総称する。

【現代語訳】

十二経にはみなそれぞれに動脈があるのに、ただ寸口だけで、五臓六腑の疾病や予後の良し悪しを、診断できるのはなぜか。

答え。寸口は十二経脈の集まるところで、手の太陰肺経の動脈である。普通の人が息を一つはくと脈は三寸行き、息を一つ吸うと脈は三寸行くので、一回の呼吸では脈は六寸行く。人は一昼夜の間に

一万三千五百回の呼吸をし、脈は全身を五十回循環する。漏水百刻〔一昼夜〕の間に、営衛は日中に二十五回、夜間にも二十五回まわる。これが一周であり、五十回まわったときにはまた、手の太陰の寸口に会する。要するに、寸口は五臓六腑の気血が循環する発着点であるので、脈診は寸口で取るのである。

【解説】

「十二経にみな動脈あり」の内容

十二経とは手足の三陰三陽の経脈をいう。十二経脈には以下のようにいずれにも動脈がある。

1 手太陰経――中府、雲門、天府、侠白
2 手陽明経――合谷、陽谿
3 手少陰経――極泉、神門
4 手太陽経――天窓
5 手厥陰経――労宮
6 手少陽経――本髎
7 足太陰経――箕門、衝門
8 足陽明経――大迎、人迎、気衝、衝陽
9 足少陰経――太谿、陰谷
10 足太陽経――眉衝
11 足厥陰経――太衝、足五里、陰廉
12 足少陽経――聴会、頷厭

これらの経穴は、押すと搏動を感じるので「十二経にみな動脈あり」というのである。

二、脈診は「ひとり寸口にのみ取る」ということの原理

脈を診る方法として、『素問』三部九候論篇には、全身三部九候の脈診法が記されている。三部九候は十二経のすべてと連携しており、同時に、十二経は内在する臓腑とも絡属の関係があるので、こうした方法で疾病を診断できるという。その原理は理解しやすい。しかし、「寸口」は手の太陰肺経にのみ属するのであり、ここで五臓六腑の病変を診断するのに、「ひとり寸口にのみ取る」を提起したこと、このことは脈診法のうえで一大発展であり、後世に多大な便宜を与えた。

その原理は、原文に記されている「寸口は、脈の大会なり」、すなわち、寸口は十二経脈の経気が集まるところであるという点にある。『素問』経脈別論篇に「脈気は経に流れ、経気は肺に帰り、肺は百脈をあつめる」とあるように、肺はすべての経脈と密接に関係しているので、五臓六腑に病が生じたり気血の運行に異常があれば、肺経に影響が現れ、したがって気口（寸口）に反映する。同時にまた、『素問』五臓別論篇に、「胃は水穀の海であり、六腑の源泉である……ゆえに五臓六腑の気味はみな胃

から出、その異変は気口（寸口）に現れる」とあるように、〔寸口は〕胃気の作用とも関係する。実際には、これは真気の生成および真気と疾病との関係という問題にまで、関係することであるから、「ひとり寸口にのみ取る」ことで、疾病を診断できるのである。

三、営衛が人体を運行する回数

「人は一呼にして脈の行ること三寸、一吸にして脈の行ること三寸」から「五臓六腑の終始するところなり」までの段落は、営衛が昼夜の間に運行する回数を述べ、一昼夜に五十回まわってまた手の太陰経に合し、その運行の発着点は手の太陰経であるとしている。そのうち「栄衛の陽を行ること二十五度、陰を行ることもまた二十五度」は、営衛が一昼夜に運行する回数を概括的に述べたものであり、全部で五十回まわって、「一周」としている。

【本難の要点】

一、脈診では、ただ手の太陰の寸口を取るだけでよい、という原理を説明している。これは『難経』が切脈法においてなした一大発展である。また、寸口が営衛血気の循行する発着点であり、五臓六腑と非常に密接に関係することから、「ひとり寸口にのみ取る」根拠を述べている。

二、営衛が人体を運行する回数を説明している。つまり、日中二十五回、夜間にも二十五回、合計五十回まわり、その運行の始めと終わりはともに手の太陰経である。

第二難

◎切脈の部位――気口について論ずる。

【原文】

二難曰、脈有尺寸、何謂也。

然。尺寸者、脈之大要会也。従関至尺是尺内、陰之所治也。従関至魚際是寸口内、陽之所治也。故分寸為尺、分尺為寸。故陰得尺内一寸、陽得寸内九分。尺寸終始一寸九分、故曰尺寸也。

【書き下し】

二難に曰く、脈に尺寸①ありとは何の謂ぞや。

然り。尺寸は、脈の大要会②なり。関③より尺に至る、これ尺の内、陰の治むるところ④なり。関より魚際⑤に至る、これ寸口の内、陽の治むるところ④なり。故に寸を分かちて尺となし、尺を分かちて寸となす。故に陰は尺の内に一寸を得え、陽は寸の内に九分を得う。尺寸は終始一寸九分、故に尺寸というなり。